**松尾　馬奮 （まつお・ばふん）**

**１、プロフィール**

大正15年三戸川柳吟社創設、三戸川柳社の礎石を築く。戦後、青森県川柳社に加盟、建設的な意見で県柳界を刺激、中央柳界からも陸奥の快翁馬奮様として親しまれた。

＜生没＞

1886（明治19）年３月15日 ～ 1965（昭和40）年９月19日

＜代表作＞

川柳句集『翁』『命の値だん』『泥足』

＜青森との関わり＞

三戸村（現三戸町）に生まれる。県内の銀行、信用組合等に勤務。地元に川柳社を興し、郷里を活動の舞台とする。

**２、作家解説**

本名庄次郎。明治33年に三戸尋常小学校卒業。36年三戸銀行に入社、以後金融機関が生涯の仕事となる。大正元年三戸銀行副支配人となるが、この頃より川柳に関心を持ち、柳号に馬奮というペンネームを用い実作に励む。そして大正初年の「東奥日報」における東奥柳壇の投句者として注目された。

大正15年に長谷川霜烏と三戸川柳吟社を創設、同人に岡田児、泉山牛耳、工藤凡平、安宅銀一、小林洋二、白木虎児等がいた。この頃県外には投句せず、黒石の「みちのく」にもっぱら投句していた。昭和12年三戸銀行が第59銀行と合併、15年に馬奮は第59銀行野辺地支店に転勤、支店長となる。18年第59銀行は青森銀行と改称されるが、21年に同支店長で退職、その間やや衰退を見せていた野辺地川柳社の再興に努力した。昭和29年青森県川柳社に加盟、小林不浪人、成田我洲、後藤蝶五郎亡き後は彦左衛門と自称し、県柳界の隆盛に貢献した。

36年に喜寿を記念して「松尾馬奮喜寿祝賀全国川柳大会」が三戸町において開催されているが、北海道、東京、兵庫県等からも参会、150名余の柳人が会して盛会を極めた。氏の柳人としての実力、交遊の広さ、そして人徳のしからしめるところであろう。なお、同年句集『翁』も刊行している。また11月３日には、これまでの本県川流界の発展に寄与した功績でもって、第３回青森県文化賞が授与されている。川柳人としては初めてである。38年には県褒賞受賞、40年６月には三戸町の城山公園に「叱っては見たが子供は俺に似る」の句碑が建立された。それから３ヵ月後の９月19日に他界、「たったいままでの命の有難味」が辞世｡死後､句集『命の値だん』（41年９月）『泥足』（42年12月・自筆句集）が刊行されている。

青森銀行退職後は地元の信用組合の専務理事を務めるなど、金融界に尽くした功績も大きく、また、善行者としてもよく知られており、表彰されている。

**３、資料紹介**

〇馬奮句集『泥足』

図書

1967（昭和42）年12月

190mm×135mm

馬奮３周忌を機に、生前手習いのつもりで和紙へ書いていた句帖を複製、それに川上三太郎の序及びゆかりの人々の文章等を掲載し１冊にまとめたもの。三太郎選句のものが相当収録されており、リアリズムを基調とした人間味あふれる句が多い。和綴本。